

Woman's divinity school affiliated to Holy Resurrection Cathedral and women of Miyagi in the Meiji era

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 和賀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24026

明治期ニコライ堂の女子神学校と 宮城の女性たち

佐 藤 和賀子

はじめに

東京都千代田区神田駿河台にある東京復活大聖堂（通称ニコライ堂）は1884年（明治17）に起工し、1891年（明治24）3月8日に開堂式がおこなわれた。その2か月後の5月11日に来日中のロシア皇太子が津田三蔵によって襲撃された大津事件がおきた時、ニコライは山下りんが製作した聖像を献上し見舞っている。

ニコライは聖堂建設開始の前年1883年（明治16）に寄宿舎付きの女子神学校を創立した。明治期、この女子神学校に宮城県のハリストス正教会の女性信徒たちが、生徒として教師として深く関わっている。女子神学校は大正末に閉校になった。

明治期の女性のハリストス正教徒については、聖像画家の視点から山下りんに関する研究が多い⁽¹⁾。近年、ようやく他の女性信徒にも研究が及び、その代表的な成果として中村健之介・中村悦子『ニコライ堂の女性たち』（教文館、2003年）がある。同書はエレナ酒井ゑい、イリナ山下りん、フェオドラ北川波津、テクサ酒井澄子、エレナ瀬沼郁子、ナデジダ高橋五子、ワルワラ中井終子の7人を取り上げている。

ニコライが1870年から1911年まで約40年にわたり書いた日記や手帳等は、ニコライの死後、関東大震災の前に、日本宣教団の監督官庁であるロシアのペテルブルグの宗務院へ送られていた⁽²⁾。この日記は中村健之介氏の監修で翻訳され、『宣教師ニコライの全日記』（以下、括弧無しで日記と記す）全9巻が2007年（平成19）に刊行された。この日記は、女子神学校で働いている日本人女教師の様子や人物評価が、ニコライという外国人「上司」の視点で記されてい

る点でも興味深い。

本稿では、これまで女子神学校について纏まった研究がないので、最初に女子神学校の沿革と教育内容を紹介し、次いで、明治前半期に女子神学校に入学した宮城県の正教徒の女性たちと、仙台正教会出身の二人の女性教師菅野秀子と白極良子を取り上げる。女子神学校の実質的な校長であった舎監の菅野秀子が、ニコライの学校運営の協力者として、いかに評価されていたのかをニコライの日記等から明らかにする。白極良子に関しては、彼女が担当した女子神学校の裁縫教育について検討する。

以上から、女子神学校のなかの宮城の女性たち、一方では宮城の女性史の中での女子神学校について双方向的に考察したい。

1 ニコライの函館時代

1858年（安政5）に安政五か国条約の1つである日露修好通商条約が調印された。初代ロシア領事ゴシュケヴィッチは、箱館上大工町（現在の函館ハリストス正教会の地）に土地を選定し、1860年（万延元）に聖堂が移築され、領事館が建てられた⁽³⁾。その翌年、1861年（文久元）に修道司祭ニコライ・カサートキン（1836～1912）が箱館ロシア領事館付属聖堂の管轄司祭として着任した⁽⁴⁾。

1868年（慶応4）4月に3人の日本人、元土佐藩士で箱館神明社の神官澤邊琢磨、仙台藩の金成村出身の医師酒井篤礼、能登半島出身の浦野大蔵が箱館でニコライから洗礼を受けた。この年の1月にはすでに鳥羽・伏見の戦が始まり、同年3月に新政府は「五か条の誓文」を公布して国策の基本方針を示し、対民衆対策としては旧幕府の方針を受け継いだ「五榜の掲示」

を掲げた。その中の一つに「永世の定法」としての「切支丹邪宗門ハ旧ニ仍リテ之ヲ嚴禁ス」があった。受洗した3人は迫害（正教では「窘遂」という）を逃れるために箱館を去ることになった。

ニコライは1869年（明治2）に一時帰国し、1871年（明治4）4月に再来日した。同年7月廃藩置県の詔書が出されて、東京は帝都としての機能を整えつつあった。ニコライは宣教の本拠地を東京に定め、1872年（明治5）に函館を去った。

2 女子神学校の沿革

(1) 「女学校」時代

1872年（明治5）9月、ニコライは東京市神田区駿河台東紅梅町6番地にあった広大な屋敷の一部2300坪を購入した。

その翌年、1873年（明治6）2月に切支丹禁制の高札が撤廃された。同年4月、千葉卓三郎は酒井篤礼と共に上京し、ニコライから洗礼をうけた。この時、後に女子神学校の舎監になる菅野秀子も受洗した⁽⁵⁾。

1874年（明治7）5月にニコライは伝教者を招集し、日本正教会初の布教会議を東京で開いた。この会議では、全国布教のための組織と方針を定めた20条からなる「伝教規則」が作成された。「伝教規則」第13条で「教会衆女及び幼女の爲め、女伝教人を立て学校を設く可し。但宮城県女伝教二人にて一人は広く伝宣をなし一人は幼女を導くに事当す」⁽⁶⁾とある。女性のための学校設置を明文化している。「宮城県女伝教二人」と特記されているが、ニコライの念頭にあった1人は菅野秀子であろう。

女子神学校が正式に東京府から認可されるのは1883年（明治16）である。それ以前、女子神学校の揺籃期に相当する歴史が明治7年頃からあった。

1874年（明治7）ロシアからヤコフ・チハイが伝教学校の聖歌教師として着任した⁽⁷⁾。数名の女子が聖歌を学ぶために集められた。チハイはニコライの許可を得て、この女子のために

「学校様のものを設け」⁽⁸⁾、音楽以外の教科も教えた。

1876年（明治9）、ニコライは土地を入手した時に既に建っていた古い家屋の1つを寄宿舍と校舎に充て「女学校」を開き、菅野秀子を舎監にした。この時の生徒に、将来、女子神学校の教師になる児玉菊子と泉水イヨの2人と、澤邊琢磨の義理の娘澤邊房子もいた⁽⁹⁾。

「女学校」の実態をみると、学科は教理、地理、数学、万国歴史、作文、習字、裁縫があったが、担当教師を欠く学科もあり不完全なものであった。教室は床の朽ちた隙間から筍や雑草が伸び、歩行中に床が陥没するような老朽した教場であった。教育環境は粗末であったが、1878年（明治11）には通学生6人、寄宿生19人の25人が学んでいた。寄宿生の全員が信徒で、その半数は司祭や伝教者の娘、妹、姪、婚約者であった⁽¹⁰⁾。

(2) 私立「女子神学校」の開校

ニコライは神田区駿河台北甲賀町に移転した。1882年（明治15）12月28日に北甲賀町12番地を住所とする男子の「神学校」の「開校願」が、神学校主幹栗野得一郎の名前で東京府知事芳川顕正に提出された。神学校は1897年（明治30）9月に正教神学校に改称した⁽¹¹⁾。

一方、女子神学校については、東京麹町に鹿鳴館が開館する半年前の1883年（明治16）5月、ニコライは「女子神学校設立開申書」を主幹佐藤秀六の名で東京府知事芳川顕正宛に提出した⁽¹²⁾。佐藤秀六は1839年（天保10）に生まれ、仙台藩校養賢堂で漢学、算術、習字等を学んだ。1878年（明治11）にハリストス正教会の司祭に叙せられた。

「開申書」の添付書類によると、女子神学校は北甲賀町13番地に開設されて、校舎の敷地面積は約500坪、建物の総坪数は142坪である。生徒定員は80人、教師4人。入学資格は高等科小学卒業の者、もしくは同程度の学力がある者。履習科目は修身学、読書、作文、唱歌、裁縫、家事経済、算術、簿記、図画の9科目で、授業料は無料である。在学期間は4年（後に3年制

の予備科と、さらに4年間学ぶ7年制の全科になった)。授業時間は午前7時30分から午後4時30分まで。休日は毎日曜日の他に、7月15日から9月15日まで、12月29日から翌年1月15日まで。寄宿生については、費用は1か月5円、門限は平日休日共に午後6時である。

女子神学校の教育目標を「生徒訓誡」からみると「内ハ則撙節退讓」「外ハ則婉婉聽從」⁽¹³⁾とあり、へりくだり、しとやかで、従順な女性を育成することを目指していた。

1883年(明治16)にロシアから帰国した山下りんは、女子神学校の校舎内に住み、イコン製作を続けた。「移転後の女学校は、十棟の建物と一棟の西洋館とを以て成れり、其中重なる三棟を修繕して寄宿舎に当て、西洋館を以て教場並に聖像画師山下イリナ姉の住所となし、其傍の小屋を以て絵画工場となせり」⁽¹⁴⁾とある。

女子神学校が立地する「神田区」には、明治初期から女子の教育施設の開設が相次ぎ、芳英女塾(1871年開設)、東京女学校(1872年)、英和女学校(1875年)、跡見学校(同)、東京女子師範学校(同)などがあつた⁽¹⁵⁾。

女子神学校が開校した翌年1884(明治17)から聖堂の建設が始まった。一部の聖職者等は、聖堂建築の費用より伝道費を優先すべきとの理由から建設に反対し、司祭澤邊琢磨を中心に「有志義会」を結成した。しかし、建設は内部の紛糾によって中断されることもなく継続された。1886年(明治19)に女子神学校は寄宿舎からの出火で全焼したが、翌年、さらに立派な校舎が新築された。

大聖堂は1891年(明治24)3月8日に竣工し、盛大な成聖式がおこなわれた。この時期、女子神学校に在学していた仙台出身の卒業生(9回生)は、その時の賑わいを伝えている。

「明治二十二年八月二十五日、私は仙台から神学校の石川さんに連れられて田手神父の娘さんといっしょに上京、田手さんは十二才、私は十才でした(中略)其時は女学校の生徒は四十五人位、神学校は三十人位でした。聖堂は工事中で明治二十四年の二月に落成致しまして盛でございました。聖堂のまわりをまわります時に

「此光栄の王はたれなるや万軍の主彼は光栄の王なり」と何回も歌ってまわりました。有栖川の宮様御夫妻が天皇陛下の御名代で御出でになりまして、宮様は白の長いすそを引いた服でした。主教様も白い金ピカの祭服でした。聖堂の中は一杯の人でうづまり、赤と白の餅を神田中の家々の人に配りましたが三週間も続きました。女学校もお正月の様に三日間赤白のお餅を毎朝おぞうにやおしるこでいただきとてもにぎやかでした」⁽¹⁶⁾

(3) 女子神学校の生徒数の動向

1883年(明治16)に女子神学校の1回生8人が卒業した。8人は「女学校」で既に学んでいた生徒たちで、そのなかの太田辰子、泉水イヨ、酒井澄子(酒井篤礼の娘)は母校の教師になった。澤邊房子も同年卒業した。

<表1> 1883年～1895年の卒業者数

年	卒業者数(回生)
1883(明治16)	8(1回生)
1884(明治17)	
1885(明治18)	14(2回生)
1886(明治19)	
1887(明治20)	
1888(明治21)	5(3回生)
1889(明治22)	
1890(明治23)	5(4回生)
1891(明治24)	
1892(明治25)	5(5回生)
1893(明治26)	9(6回生)
1894(明治27)	11(7回生)
1895(明治28)	10(8回生)
合計	67人

出典:『鏡花録』25～35頁から作成

<表1>にあるように、1892年(明治25)から1895年(明治28)まで毎年卒業生を送り、学校運営が安定してきたことを示している。俳人高浜虚子の妻になったフィウ大畠糸子は8回生である。

1886年(明治19)復活大祭日のニコライの日

記⁽¹⁷⁾によると、教会付属の学校は4つあり、各校の在校生の人数は神学校40人、女子神学校38人、伝教学校24人、誦経者学校8人であった⁽¹⁸⁾。

1896年（明治29）4月9日に、「女学校」から数えて創立20周年と併せて舎監菅野秀子の古希を祝う会が開かれた。古希（70歳）の祝会ではあるが、実際の菅野は数え歳で76歳であった。女子神学校の同窓会は、創立20周年を記念して冊子『鏡花録』を纏めた。その際、1875年（明治8）から1895年（明治28）までの卒業生190人を調査した結果、入校年と退校年（中途退学と卒業）が確認できたのは102人、未確認は62人、逝去者26人である。卒業生として名前が判明している人のなかに、190人の中から脱漏している人もあり、1895年（明治28）までの入学者は卒業生67人の3倍程の200余人と同窓会は推定している⁽¹⁹⁾。

1895年（明治28）に日清戦争が終わり、社会が落ち着きを取り戻した1896年（明治29）6月27日⁽²⁰⁾のニコライの日記には「女学校は、入学の問い合わせが引きもきらず。もうこれ以上は不可能。きょうはアンナ〔菅野舎監〕を呼んで、今回受け入れを断る人を確認し、欠員が出

た場合はすみやかに連絡して入学させることを当人に通知した。志願者には自費の異教徒もいる⁽²¹⁾とある。「入学の問い合わせが引きもきらず」と記す程の入学者が殺到した翌年の1897年（明治30）7月9日の時点で在校生は87人であった⁽²²⁾。女学校の定員は80人であるので、この頃が正教女学校の全盛期であろう。

(4) 教育内容

女子神学校創立から16年が経過した1899年（明治32）に、神田区長桑田房吉に提出した書類⁽²³⁾から、女子神学校の教育内容を男子の正教神学校と比較する。

① 入学年齢

（女子神学校）満9歳以上～満15歳以下

（正教神学校）満14歳以上～満18歳以下

② 入学学力

（女子神学校）尋常2年卒業以上の者

（正教神学校）高等小学全科卒業の者、或は是に相当する学力を有する者

③ 学科

（女子神学校）＜表2＞＜表3＞参照

（正教神学校）＜表4＞＜表5＞参照

＜表2＞ 女子神学校 予備科で履修する学科

学 科	1 年	2 年	3 年
教理	正教会要課 初実の果	旧約聖史略	新約聖史略
読書	小学読本	前期ノ続	前期ノ続
地理	東京府地理	日本地理	前期ノ続
理科		自然物 鉱物界、植物界	動物界 水 地上及空中ノ水
数学	珠算加減乗	珠算除法 筆算加減	珠算四則応用 筆算乗除
書取	漢字交ノ書		
作文	通信文	普通文、通信文	普通文、通信文
習字	楷書	楷書	楷書
裁縫	素縫、直線	子供帯、単物	単羽織、裁方
唱歌	聖歌、普通歌	聖歌、普通歌	聖歌、普通歌
体操			

出典：「第三課文書・学務・各種学校・第3巻＜第三課（官房）＞」（東京都公文書館）から作成

<表 3> 女子神学校 本科で履修する学科

学 科	1 年	2 年	3 年	4 年
教理	正教訓蒙	教会史略	新約聖書	定理神学
漢文	漢文学小読	十八史略 元明史略	日本外史	論語 文章規範 劉向列女伝
国文	女子国文	十六夜日記 土佐日記	神皇正統記	竹取物語 方丈記
数学	四則応用 分数 小数 諸筆算	諸比例、利息、平均 法、開方、級数、 求積	代数諸法 一次方程式	二次方程式
簿記				家計簿記
理科	化学	物理学	物理学	
地理	万国地理	万国地理		
文典	日本文典	日本文典	国文軌範	国文軌範
作文	紀事 通信文	紀行 通信文	論説 通信文	雑体 通信文
生理			生理学 健全法	
歴史	日本歴史	支那歴史	万国歴史	万国歴史
図画	鉛筆画	鉛筆画	鉛筆画 水彩画	鉛筆画 水彩画
習字	楷書	楷書	行書	草書 仮名
唱歌	聖歌 普通歌	聖歌 普通歌	聖歌 普通歌	聖歌 普通歌
裁縫	袷物、綿入	小物、羽織	夜具 男女帯	袴 紬絹重ね
刺縫			平縫、総縫	金糸縫
編物				
割烹				
体操				

出典：<表 2>に同じ

<表 4> 正教神学校 神学科

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	7 年
正教訓蒙	新約聖歴史	教会史	教会史	旧約聖書	新約聖書	新約聖書
旧約聖歴史	奉神礼解			基礎神学	定理神学	定理神学
				教会史	倫理神学	倫理神学
				説教学	基礎神学	比較神学
					露西亞教会史	教会法学

出典：<表 2>に同じ

注) 原資料⁽²⁴⁾では7年制の正教神学校で履修する学科を「神学科」と「普通学科」に分けて記載している。本稿でも2つに分けて表記する。

<表 5> 正教神学校 普通学科

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	7 年
国文読本一、二、三	国文読本四、五	神皇正統記	土佐日記	増鏡	大鏡	万葉集
大林中学日本文典上	今昔物語	方丈記	徒然草	紫氏日記	古事記	落合大文典四
日本外史	大林中学日本文典中	大林中学日本文典下	大久保中文典正統	落合大文典一、二	落合大文典三	荘子
日本政記	十八史略	正統文章軌範	春秋左氏伝	孟子	大学	老子
露西亜語楷梯	史記列伝	唐宋八大家文	戦国策	論語	中庸	作文
露西亜文法	露西亜語読本	露西亜語読本	露文和訳	心理学	心理学	体操
算術	露西亜文法	露西亜文法	和文露訳	哲学史	哲学	宗教唱歌
作文	万国地理	万国歴史	露語会話	幾何	作文	
日本習字 露西亜習字	化学	物理学	論理学	平面三角術	宗教唱歌	
宗教唱歌	算術	代数	万国歴史	作文	体操	
体操	代数	幾何	代数	宗教唱歌		
	作文	作文	幾何	体操		
	宗教唱歌	宗教唱歌	作文			
	体操	体操	宗教唱歌			
			体操			

出典：<表 2>に同じ

男子の正教神学校では「国漢以外はロシア語の基礎を教えた上で専門学科はすべてロシア語のテキストを使用した。したがって卒業生は教職者として十分な知識を修得しただけでなく、みなロシア語に堪能であった」⁽²⁵⁾ ことが指摘されている。

女子神学校の履修学科を、正教神学校と比べると、ロシア語の学科が全く無いこと、また、この時期のキリスト教系女学校にはある英語が無いことが特徴である。

女子神学校では<表 2><表 3>の学科を次の19人の教師で担当した⁽²⁶⁾。

古屋幸作、松見謙二、金須嘉之進、大越文五郎、児玉菊子、高橋五子、荻原澄（酒井澄子）、白極良（子）、泉水イヨ、中村鈴子、中井終子、吉田登勢、中島浪子、赤石正、八木理子、児玉愛子、大川美能子、沼辺理加子、平田かね

学科のなかにある体操は、担当教師がいないので、授業の実態は不明である。

女子神学校は「神学校」の名を付してはいるが、同校の卒業生には司祭、伝教者になる進路は開かれていなかった。生徒は司祭や伝教者の妻になるか、または母校の教師になる人材として教育された。一般の正教徒や未信徒と結婚した卒業生は、家庭内で信仰生活を守り、信仰を次世代へ伝える役目を担った。

明治期、ハリストス正教会以外の女性の神学校は、1880年（明治13）神戸に女子聖書学校（1908年神戸女子神学校に改称）、1881年（明治14）横浜に偕成伝道女学校（1907年共立女子神学校に改称）、1888年（明治21）に神戸女子伝道学校（1899年ランバス記念伝道女学校に改称）が開校した。いずれも女子教職者の養成機関で、神戸女子伝道学校の例をみると、1889年（明治22）から1896年（明治29）の間に、卒業生54人のうち半数を超える28人が伝道師になっている⁽²⁷⁾。

(5) 日露戦争と女子神学校

日露戦争のさなか女子神学校は授業をおこなった。日露戦争が終結した翌年1906年（明治39）の「正教新報」（615号）には、後述の佐々木郁を含む卒業生13人の名前が掲載されている。

女子神学校の関係者は、日露戦争による日露両国間の緊張にどのように対処したのであろうか。ロシア公使はニコライの身を案じて帰国を勧めた。しかし、ニコライが帰国を拒否したので、ロシア公使はフランス公使に外務省との交渉を依頼し、さらに外務省から内務省へ話が進み、その結果、ニコライの身辺が保護されるようになった。しかし、一般の信徒に対しては投石など様々な嫌がらせがあり、さらに1904年（明治37）1月には女子神学校の教師高橋五子の弟高橋門三九が、「露探」（ロシアのスパイ）の容疑で逮捕される事件がおきた。女子神学校の教師と生徒は汚名挽回のために「恤兵通信隊」を組織して傷痍軍人の手紙の代筆や応急処置を計画したが、政府から許可がおりず断念した。一方、日本残留が正式に認められたニコライは「捕虜信仰慰安会」を結成し、日本各地の捕虜収容所を慰問した。

1905年（明治38）9月に日露講和条約が調印された。しかし、条約の内容に不満をもった民衆が東京の日比谷で講和反対国民大会を開くと、民衆の勢いがニコライ堂にも及ぼうとした。卒業生（24回生）の一人は、この時の騒動を次のように回想している。

「九月のある夜、日比谷の焼き打ち騒ぎがあり、私達は夜半に起され、なるべく黒い着物をきて洗面道具、チリ紙、櫛を持って下の講堂に集まるように云われて、下の講堂に集まりましたら、何やら外で騒しい声がきこえ、又馬蹄の音もきこえたので、恐しく皆顔を見合せて居りました。其人声はニコライ堂とニコライの学校を焼きつふせと云うて、三組に別れカン声をあげる組、石油をかける組、火をつける組の人達の声で、学校の塀（木柵の塀でした）に石油をかけ、まさに火をつけんとした時に、天皇陛下の命に依りて、近衛から守備にかけつけて来た馬蹄の音でした。学校も焼けずにすみ、翌日こ

のさわぎを知らない外来の先生方や通学生達が学校に来ますと、兵隊が立番して門内に入れてくれず、門番の証言でようやく入れて貰うので、何があったの、とびっくりして居りました。それから毎日兵隊さんが交替に来て、聖堂と学校の門に立って居て、祈祷及び聖歌の稽古に行くにも門鑑を見せなければ通れませんでした。それが二ヶ月続いた様に覚えております」⁽²⁸⁾

(6) 女子神学校閉校まで

1899年（明治32）に「女学校」時代からニコライの片腕として実質的な校長であった菅野秀子が死去した。1901年（明治34）には京都正教女学校を開校するために、東京の女子神学校の牽引力であった高橋五子が転出した。1905年（明治38）に酒井澄子が肺結核のため37歳で死去し、1910年（明治43）には古参の裁縫教師である白極良子が66歳で病没した。女子神学校の中核であった優秀な教師たちが、ニコライのもとから次々と去っていった。

1911年（明治44）7月ニコライ宣教50年を記念する祝賀会が東京復活大聖堂で盛大に行われた。同年1月1日現在で教会数265、信徒数は31,984人と記録に残る⁽²⁹⁾。日本での宣教の成果を見届けたかのように、ニコライは翌年1912年（明治45）2月16日に満75歳で永眠した。

女子神学校の活動を伝え続けた『裏錦』は1907年（明治40）11月に178号をもって廃刊になった。『裏錦』は1892年（明治25）11月に創刊された雑誌で、女子神学校内にある出版部「尚綱社」から月1回発行された。編集者はニコライの翻訳協力者で漢学者中井木菟麿である。『裏錦』は聖書解説、評論、家事・家庭欄、文芸作品、女子神学校や正教婦人部の広報などを掲載する女性向けの総合雑誌である。豊かな文才をもつ女子神学校の教師たちが文芸欄を充実させた⁽³⁰⁾。酒井澄子は佐佐木信綱が主催する竹柏会の歌誌『心の花』の同人であった。高橋五子は音楽の才能にも恵まれた才女で、作曲家山田耕筰は五子の従弟である。彼女は中井木菟麿のもとで磨いた漢文の素養をいかし漢詩を投稿した。中井木菟麿の妹中井終子は酒井澄子

と共に歌会「夕秀舎」をつくり、生徒の短歌創作を指導、優秀作品は『裏錦』に掲載された。山田郁子は桔梗の筆名で小説などを投稿した。中堅教師であった高橋五子と酒井澄子が学校を去り、その数年後の『裏錦』廃刊は、女子神学校の発展に陰りがみえてきた証でもあった。

1918年（大正7）には、中井終子が学校運営をめぐりニコライの後任であるセルギイ主教等と確執を生じ辞職した。翌年から故郷大阪の梅花高等女学校に勤務した。その後、兄の木菟麿も同校の教師になり、東京の女子神学校から有為な人材である中井兄妹が去っていった⁽³¹⁾。

女子神学校はロシア革命によってロシア正教会からの経済的援助が無くなり、さらに関東大震災で校舎が崩壊し、その後再建されることなく、1923年（大正12）に廃校になった。

(7) 明治期の正教会の女学校

函館正教会では、酒井篤礼の死後、妻ゑいが1884年（明治17）に信徒以外の女性の入学も許可する「裁縫女学校」を開校した。女子神学校で学んだ澄子と実の姉妹が母の学校運営を助けた。1890年（明治23）には「裁縫女学校」を「正教女学校」に改称した。別科の洋服裁縫科を設けて時代の要請にこたえる努力をしたが、1901年（明治34）3月頃に廃校したとされる。

京都正教女学校が、1902年（明治35）に京都市柳馬場通二条北に開校した。京都正教女学校規則⁽³²⁾によると、修業年限は予備科2年本科5年である。京都正教女学校ではロシア語が本科の学科にあった。校長は京都正教会司祭三井道郎で、高橋五子は舎監兼教頭であった。

開校から2年目に日露戦争があり、捕虜収容所に慰問に出かけた生徒の一人は、その時の記憶を次のように記している。

「捕虜収容所は、京都は本国寺、東福寺、智積院、大津三井寺に有りました。私らは慰問の役を命ぜられました。私らは廣田先生につれられ、三井寺へ慰問に行きました。どこから乗ったか忘れましたが、未だ大津駅は有りません。大谷で汽車を下り、逢坂山を歩いて、三井寺につきました。山内に礼拝堂がこしらえて有りま

した。兵隊は大悦びで寺院の部屋に通し、黒パンとミルクのご馳走になりました。兵隊は自分の持物の中から、私は本を二冊もらいました。聖書のようなです。今も持って居ります。帰りは山門迄送って来て、兵はバンザイ、私らはウラーを、手を上げさげびました。中々に止みません。名残惜んで帰途につきました」⁽³³⁾

京都正教女学校は1912年（明治45）にニコライが死去すると、東京の女子神学校との合併問題などが浮上し、1918年（大正7）3月に最後の卒業生を送り閉校した。その年9月に高橋五子は「独立運営とも正教会付属ともつかない状態のまま」で「関西正教女学校」を兵庫県武庫郡良元村字蔵人に開いた。養鶏畑作果樹栽培の農作業をしながら学ぶという計画であったが、経営的に破綻して1921年（大正10）に廃校になった⁽³⁴⁾。

3 宮城県出身の女子神学校入学者

1896年（明治29）の創立20周年に実施した調査で、回答があった卒業生102人の出身地は次の通りである。

北海道（6人）：函館5人、室蘭1人

東北（31人）：青森県3人、岩手県8人、秋田県1人、宮城県15人、山形県2人、福島県2人

関東（39人）：茨城県3人、栃木県2人、群馬県7人、埼玉県1人、神奈川県5人、東京府21人

中部（10人）：静岡県6人、岐阜県1人、長野県2人、石川県1人

近畿（6人）：和歌山県2人、大阪府3人、兵庫県1人

中国（2人）：岡山県1人、広島県1人

四国（3人）：徳島県2人、高知県1人

九州（5人）：福岡県1人、大分県1人、鹿児島県3人

東京出身者が多いのは、地元ゆえ当然であるが、宮城県出身者が第2位であることに注目したい⁽³⁵⁾。ニコライは東京以西の伝道強化をはかり、小

野莊五郎を1875年（明治8）に東海道へ、1878年（明治11）に鹿児島へ派遣した⁽³⁶⁾。1878年（明治11）7月の公会（年1回開かれる日本の正教会の最高決議機関）の時点で、日本の全正教教会の信徒数は4115人と報告され、そのうち旧仙台藩領における信徒数は約4割を占めていた⁽³⁷⁾。このことが女子神学校の入学者に宮城県出身者が多いことの主因であろう。

入学者の出身地を県別でみると、日本海側の

県の出身者がきわめて少ない。これは現在の日本ハリストス正教会の教会分布とも重なり、教会は太平洋沿いと瀬戸内海沿いに多い。日本ハリストス正教会教団発行の「正教会マップ」⁽³⁸⁾によると、全国の63教会のうち、実に、3分の1に相当する21教会が岩手県、宮城県に集中している。

宮城県出身者15人の入校年齢と入校・退校年月は次の通りである。

＜表6＞ 宮城県出身者の女子神学校入校年齢と入校・退校年月
1876年（明治9）～1895年（明治28）

聖 名 名 前	出 身 地	入校時の満年齢	入校年月	退校年月
ナデズタ影田	仙台	8歳	明治9年8月	18年7月
ソフィア高屋	仙台	8歳	9年9月	17年7月
エウフィミア新妻	仙台	9歳	10年9月	13年7月
フォティナ佐藤	仙台	14歳	14年4月	18年7月
イヲアンナ沼邊	仙台	17歳	14年10月	17年2月
フォティナ横尾	志田郡	15歳	15年9月	17年9月
エカテリナ横尾	仙台	13歳	16年9月	18年7月
ナデズタ石田	仙台	16歳	17年2月	19年12月
マリヤ白極	仙台	39歳	18年10月	在職中
アンナ佐藤	仙台	14歳	19年10月	21年7月
ナタリア白極	仙台	15歳	20年10月	21年7月
アンナ田手	仙台	9歳	21年9月	22年9月
マトロナ佐藤	仙台	14歳	22年4月	25年7月
キリアキア横山	遠田郡	11歳	23年10月	28年7月
エウゲニア大和田	黒川郡	13歳	24年8月	27年7月

出典：『鏡花録』109頁～128頁から作成

宮城県では女子の中等教育はキリスト教系女学校の開設によって始まった。1886年（明治19）に宮城女学校（現在の宮城学院高等学校）、1893年（明治26）に仙台女学校（現在の仙台白百合学園高等学校）、1899年（明治32）に尚絅女学校（現在の尚絅学院高等学校）が開校された。現在に至るまで仙台のハリストス正教会による女学校は開設されていない。明治初期の未だキリスト教系女学校がなかった時代に、宮城県のハリストス正教徒の女子にとって、東京の女子神学校は中等教育の進路として重要な役割を果たしていたことがわかる。

4 仙台正教会出身の女子神学校の教師

(1) 女子神学校の舎監ーアンナ菅野秀子

菅野秀子は1821年（文政4）陸奥国本吉郡に生まれ、父は仙台藩に仕えた医師菅野淡水である。17歳で婿養子を迎えた。夫菅野東水は若い頃に江戸に出て大槻俊斎から西洋医術を学び、種痘の技に長けていた⁽³⁹⁾。東水との間に10人の男児を得るが、秀子38歳の時に夫が死去した。実家の父淡水は1868年（明治元）に亡くなり、我が子の夭折も相次いだ。幕末維新の混乱

の中、戊辰戦争で家産を失い、3人の息子を連れて上京した。1873年（明治6）にニコライから洗礼を受けた後、「女学校」「女子神学校」の舎監として後半生を過ごした。

『鏡花録』に掲載の「菅野秀子媼小伝」は、「古に偏せず今に泥まず、広く新聞諸雑誌を通覧して、当世の人々と時事を語る」「事に当り人に接するに際し、能く物の表裏を識別し、未だ人の耳目に触れざることをも摘発して、善はこれを奨励し、悪はこれを防ぎて増長せしめざるやう計れり」と菅野を評している。

「小伝」を書いたのは女子神学校の教師高橋五子と推察される。菅野の私生活を知る女性の同僚ならではの記述もある。菅野は寡婦として働きながら3人の息子を育ててきたが、その苦労は必ずしも報われず、1884年（明治17）から肺結核で療養中の末子を看護しながら働き、1894年（明治27）には息子が任地の隠岐で亡くなるという不幸が重なった。しかし、その容貌に不幸は見え「秀麗にして品位高く儀容端正にして言語軽快なり」「古希の高齢の人には得難き程の色沢あり」と称えている。

「正教新報」（443号）は菅野について、その人柄と業績を次のように紹介している。「菅野老姉はその名こそ一校の一舎監たるに過ぎざれ、其実際よりすれば、実に一校の校長たるの職責を全うしたるの婦人なり」と賛辞をおくっている。菅野は「旧幕時代に人と成りたる」ゆえ、「決して文明社会の教育家たるの素養あるの婦人にはあらざりしなり」と自覚していたので、老練な校長として、校務万事を支配しても、学校の教授上には、一切口を出さず、後進者に一任したことを「知恵ある行為」と評価している。菅野の教育上の功績は「普通学もしくは教理に精通したるの女子を養成したるの功にあらずして、実に一家に於ける母としての女子を教養したるにあり」と記している。菅野は病臥した後も、医師の息子家族との同居を選ばず、喧騒な寄宿舎内で生徒と起居を共にして職責を全うした。

（2）ニコライ「日記」のなかの菅野秀子

菅野秀子はニコライの日記に名前がある女性の中では、登場回数が最多である。日記から、ニコライが菅野秀子とどのように関わり、彼女をいかに評価していたかを検討する。

1895年（明治28）の5月に1か月間、菅野は大阪にいる息子宅で過ごし、女学校を不在にした。その間の金銭管理は、児玉菊子（後に、二代目校長になる）と伊東祐子（刺縫科教師）に任された。支出は通常は46円ないし47円であったが、一気に30円に下がった。菅野の不在中に支出が減少したのは、不在中の1か月間に必要な品を、菅野が前もって購入しておいた可能性もある。しかし、下がった数字をみたニコライは、菅野に対して不信感を募らせ、日記（1895年5月31日）⁽⁴⁰⁾に次のように記す。「この老婆がくすねているということが浮かび上がってきたわけだ」「見破ることはひじょうに難しい。出費の項目は、数え切れないぐらい多数あり、ほんとうに細かい」と困惑している。冷静を取り戻したニコライは「彼女はひじょうによく学校を運営し、理想的な秩序を作り出している」「女生徒たちをととても可愛がり、まるで母親のように彼女たちの世話をしている」「このような模範的な校長をほかに探すことができるだろうか」と、菅野のこれまでの職務を評価する。解決策として「もし、金の使い道がはっきりするのであれば、いまの俸給五円をやめて、一ヵ月につき二五円を与えることにするほうが、彼女を失うよりは良い」と思いなおすが、そうすれば他の教師の昇給も必要で、実現が難しいことに気づく。「わたしと彼女は、二〇年以上も女学校を管理しているのだ」と菅野への信頼を再確認して、ニコライは自分の心に結着をつけている。日記のこの箇所から、菅野の給与が月額5円であることがわかる。1894年（明治27）に、女子神学校はロシア公使館内に住む36歳のロシア人女性エレナ・チハイを西洋編物・縫箔の教師として雇った。給与は月額40円であった⁽⁴¹⁾。

ニコライは菅野が亡くなる10年程前から、ニコライより15歳程年長の菅野の老いと死につい

て書くようになった。「アンナ菅野の後任を探さなくてはならない。彼女も高齢で、すっかり弱ってしまった。あるいは死もそれほど遠くはないだろう」(1889年2月1日)⁽⁴²⁾とある。この時、菅野は数え年で69歳であった。ニコライは菅野の老いとその先の死を、菅野本人よりも気にかけているように思われる。菅野の後任を探すことが困難であるということよりも、得がたいパートナーを失うことへの不安と覚悟が交錯し、このような言葉を日記にあえて書いたのであろう。菅野は死の間際まで、学校のみならず教会の人間関係にも心を砕き、後任は菅野が亡くなる前に決まっていたので、後任人事には彼女の意思が反映されていたと思われる。

ニコライは正月に教師たちへお年玉を渡すのが恒例であった。「病気で寝ている[舎監の]アンナ菅野を女学校に訪問」(1890年1月1日)⁽⁴³⁾、「アンナ菅野に五〇銭。古ネズミ[アンナ菅野のこと。親しみのこもった言い方]は遠慮しなかった」(1891年1月1日)⁽⁴⁴⁾、「古ネズミのアンナ[菅野秀子]は病気で来ていなかったから、なにもやれなかった」(1892年1月6日)⁽⁴⁵⁾、「他の女教師たち全員と古ねずみのアンナ[菅野]にも四〇銭ずつやる」(1893年新年)⁽⁴⁶⁾。

古希の祝いの後、菅野は体調不良の日が多くなり、ニコライはその病状に一喜一憂している。「手紙を東京から受け取った。アンナ菅野[秀子]がとうとう完全に危篤状態に陥ったことを知らせてきた。胃が食べ物をうけつけなくなってしまったので、管を使って栄養をとって命を保っているそうだ」(1898年8月16日)⁽⁴⁷⁾。函館から戻ったニコライは留守中の報告をうけ「最もうれしい知らせは、女学校長の老アンナ菅野[秀子]が死ななかったばかりか、かなりよくなって、女学校のためにこれからも生きていくという期待が出てきたことだ」(1898年8月25日)⁽⁴⁸⁾と素直に喜びを記している。

山田郁子は女子神学校の卒業生で、「瀬沼夏葉」の筆名のロシア文学者として知られている。郁子は女子神学校の教師高橋五子の弟門三九と婚約していたが、正教神学校の校長瀬沼恪

三郎から求愛されると、婚約を突然破棄して瀬沼と結婚した。このことによって、正教神学校と女子神学校との間に内訌がおきた。病臥中にもかかわらず、菅野はこの騒動を上手く収め、当事者たちを和解させた。ニコライは「ありがたい！だがここまでくるのは簡単なことではなかった！」(1898年8月31日)⁽⁴⁹⁾と安堵している。

1899年(明治32)1月1日、ニコライは女学校教師の高橋五子に、菅野の伝記を作るので、その生涯を詳しく聞き書きするように言った。伝記出版の目的は、後続の女学校長のみならず全信徒への「教訓」にするためであると説明した。しかし、残念ながら、実際には伝記は作られなかった。ニコライは菅野の写真撮影も計画し、日記には「祭日のとき、それも穏やかに晴れた日を選んで全学生、教師といっしょにアンナの写真を撮らせよう。アンナは自分のベット(おそらく臨終の床になるだろう)に腰掛ければ良い。彼女の後ろに教師たちが並び、彼女の周りをできるだけびっしりと生徒たちが囲む。彼女が文字どおり学校の全生徒の母であったことがわかるように、小さな生徒たちを彼女に寄り添わせよう。もちろん、もう母という年ではないが！」(1899年1月1日)⁽⁵⁰⁾と、写真撮影の段取りを心に描いている。日記によると、同年1月3日に3枚の写真が撮影されている。

ニコライが記すように、菅野は病の床にあっても「学校の全生徒の母」であり、さらには教会関係者の母でもあった。亡くなる数か月前にも、菅野は青年伝教者から女子神学校の卒業生を妻に世話してほしい、と頼まれている(1898年7月19日)⁽⁵¹⁾。また、その数日後には、これとは別口の結婚をまとめている(1898年7月25日)⁽⁵²⁾。

菅野の死の前日、ニコライは菅野を見舞った。「骨と皮ばかりで、ほとんど全身がすでに冷たくなっている。やっとのことで舌を動かし、「ツミ(罪)」と静かに言った。そして右手で十字を切ろうと努力した。彼女の周りに座っている人々は泣いていた。主よ、彼女を肉体の苦しみから一刻も早く解放しなさい！」

(1899年4月15日)⁽⁵³⁾。菅野の闘病中は教師たちが交替で看護し、その様子を酒井澄子は「遺哀録」(『裏錦』80号)に書いている。

1899年(明治32)4月16日に菅野秀子は亡くなった。享年79。翌17日は納棺で、柩は濃いブドウ色の琥珀織の絹布で覆われて聖堂に運ばれ、女子神学校の校長パウエル佐藤によって徹夜祷がおこなわれた。18日、谷中の墓地に向う葬列は、「アンナを尊敬するさまざまな人たちが送ってきた生花の台を二〇、一つを二人一組になって、捧げ持って進んだ」「振り香炉を持った二人の輔祭、四人の司祭、そして柩が続いた。柩には金欄の柩覆い布が掛けられ、その上に二つの大きな花輪が置かれていた」「わたしの後ろに、女学校の教師と大勢の男女信徒が続いた。葬列はまことに整然と進んだ」⁽⁵⁴⁾と日記にある。ニコライは記憶に鮮明に刻んだ葬儀の一部始終を再確認するかのよう、日記に克明に記録している。

菅野の後任人事が埋葬の日に表示された。女学校の校長は児島菊子、舎監兼副校長は高橋五子、伊東祐子と荻原(酒井)澄子が補佐役になった。しかし、後述のように、従来通り、名目的には佐藤秀六が校長をつとめた。

菅野の死後、日記によると4月22日、24日、5月8日にパニヒダ(死者のための祈り)が、菅野のためにおこなわれた。5月25日の日記には「朝六時半にアンナ菅野のパニヒダを行なった。きょうで40日だ」⁽⁵⁵⁾とあり、死去からの日々を数える一文には、ニコライの喪失感と菅野への深い追慕が感じられる。

(3) 菅野秀子の親族

日記から菅野の親族関係がわかる。「きょう、仙台のアキラ金須[正平]が死んだ。女学校校長アンナ菅野の妹[みわ]の夫で、左翼聖歌隊の指揮者インノケンティ金須[嘉之進]の養父だ」(1896年12月28日)⁽⁵⁶⁾とある。つまり、金須嘉之進は、故金須正平・みわ夫妻の娘みさほの婿養子である。菅野秀子は嘉之進・みさほ夫妻の伯母にあたる。金須嘉之進の旧姓は中川である。正教徒中川操吉は兄で、その妻中川つる

(正教徒涌谷繁の娘)は1887年(明治20)仙台に身章私塾を創立した。

菅野秀子の死から6か月余り後に、彼女の息子菅野虎太が亡くなった。1899年(明治32)11月10日のニコライの日記には「大阪の医師パンテレイモン菅野[虎太]の死の知らせがあった。われわれの女学校の前校長である故アンナ[菅野秀子]の息子でありながら、かれは仏式に葬られた！なんと恥さらしな信者たちよ！妻も信者、息子も幼いとはいえ信者、パンテレイモンの同僚の医師に嫁した姪も信者だというのに」「故人は町の病院の主任医師だったから、病院で葬儀をだしたにちがいない。だが遺族は、故人が自分自身の属する信仰ののっとして埋葬されるよう主張すべきだったのに。悲しい！」⁽⁵⁷⁾と憤っている。

菅野虎太は1851年(嘉永4)に生まれた。1892年(明治25)に病気のため海軍を退職する時、退職恩給(年額350円)を受取るために、海軍大臣仁礼景範に「恩給請求書」⁽⁵⁸⁾を提出した。その時の添付書類から1892年(明治25)までの履歴をたどると、1873年(明治6)に『独和字典』を翻訳出版し宮内省に献納、1877年(明治10)以降は三重県の医学校教授、横須賀海軍病院医療掛、海軍軍医学校教官、「日新艦」「筑波艦」の軍医などを務めた。書類には「東京府下東京市神田区西紅梅町拾貳番地土族 大阪府下東成郡東平野町大字南平野第五百四拾三番屋敷寄留 海軍大軍医従六位 菅野虎太」とある。履歴書は上京後の1873年(明治6)から始まり、彼の出生地や青少年期の学歴の記載はなく、仙台との関係を履歴書から窺い知ることはいくつかできない。もし虎太の葬儀を教会で行えば、彼および親族が仙台藩出身の正教徒であることが職場にも明らかになる。仏式の葬儀は虎太本人が生前に希望したことかもしれない。明治初年、薩長閥の新政府の下で、軍医として栄達を望んだ青年が、仙台藩出身であることを、公的には伏せていたことは十分に有りうることである。しかし、ニコライには、戊辰戦争で敗者となった仙台藩出身者の心情と処世の術を慮ることは難しかったようで、信仰を貫かない虎太の

親族に立腹している。

(4) 女子神学校の裁縫教師 ——マリヤ白極良子

白極良子については正教新報（702号）掲載の「マリヤ白極姉の永眠」の記事、『鏡花録』の卒業生欄からその生涯の概略を知ることができる。

白極良子は1845年（弘化2）に生まれた。松操私塾の朴澤三代治が『仙台日日新聞』（1879年10月20日）に掲載した卒業広告によると、1879年（明治12）10月に良子は松操私塾の「裁縫上等科全科」を卒業している。この時の卒業生に前述の涌谷（中川）つるもいる。

松操私塾は1879年（明治12）1月に朴澤三代治（1823～1895）が仙台区良覚院丁一番地（現、仙台市青葉区一番町二丁目）に開設した裁縫塾である。朴澤三代治は近代教育に適した裁縫教授法⁽⁵⁹⁾を創意工夫し、東京本郷に「和洋裁縫伝習所」（現、東京家政大学）を開設した渡邊辰五郎（1844～1907）と並び、近代日本の裁縫教育の双璧として評価されている。

白極良子の夫の名前等は不明であるが、良子は寡婦になってから一人息子兵吉の養育のために、仙台に裁縫塾をひらき数十人の生徒に教えていた。「一身を専ら教会の勤めに捧げ」るために、息子を伴い上京し、1885年（明治18）に女子神学校に入学した。白極良子は松操私塾を卒業しているので、女子神学校に在学していた期間は短期間であったと思われる。

1910年（明治43）2月16日のニコライの日記に「聖堂で老女教師白極〔良子〕の葬儀と埋葬を行なった。女学校で長い間勤めてくれた」⁽⁶⁰⁾とある。日記の中にある白極良子の死に関する記述はこの文のみで、菅野秀子に比べればまったく短く、病死した白極良子の療養に関する記述もない。白極良子は菅野秀子より20歳以上も若い、両者とも仙台正教会の信徒で、寡婦の身で女子神学校に勤めて息子を育てたという共通点がある。しかし二人の間の厚誼をしめすものは確認されていない。「正教新報」（702号）は良子の人柄を「性質闊達な男勝りの資性」と

記している。

白極家は江戸時代には巨鼓や申楽で仙台藩に仕えた家である。明治期の白極姓の人物は正教会の信徒として名前が知られている。白極良子の弟、白極誠一（1850～1905）はステファンの聖名をもつ正教徒で、自由民権家であり、仙台の培根小学校（現、仙台市立木町通小学校）校長を務めた。ミハイル白極潔はニコライの日記に翻訳家として名前が出ている。

(5) 白極良子の生徒たち ——泉水イヨと佐々木郁

白極良子は仙台で朴澤三代治から直かに指導を受けた時代の生徒である。白極良子が女子神学校で実施した裁縫教育が、朴沢流を忠実に継承するものであるか、それとも、地元東京の渡邊辰五郎の裁縫教育の影響を受けているのか、これについて考えることは、近代日本の裁縫教育の二大潮流⁽⁶¹⁾の出会いを探ることでもある。この課題を考えるうえで、東京都公文書館に所蔵されている泉水イヨの履歴書⁽⁶²⁾は興味深い。

泉水イヨは1863年（文久3）に現在の山形県上山市鶴脛町で生まれ、1876年（明治9）9月に女子神学校に入学、1883年（明治16）6月に全科を卒業した。卒業直後から、さらに1885年（明治18）5月までの2年間、白極良子について和裁を修業。その後、1896年（明治29）2月から同年11月までの10か月間、渡邊辰五郎が校長を務める東京裁縫女学校の和服裁縫普通速成科で学んでいる。速成科を卒業した翌月の1896年（明治29）12月から女子神学校の裁縫教員として採用されているので、白極良子が東京裁縫女学校への進学を勧めたとも考えられる。

1896年（明治29）12月以降、女子神学校の裁縫の授業は朴澤三代治から学んだ白極良子と、白極良子と渡邊辰五郎から学んだ泉水イヨの二人が担当した。

白極・泉水の両教師から学んだ佐々木郁の裁縫作品50数点が、婚家の柏村家に100年余も大切に所蔵されていた。

佐々木郁の生涯は、郁の長男信の妻である柏村知子が書いた論文「伝記ニコライ堂で学んだ

柏村郁（一）」⁽⁶³⁾に詳しい。

佐々木郁は1890年（明治23）に北海道標津郡標津村で生まれた。郁の父佐々木源一は1856年（安政3）に生まれ「二八歳の時、北海道の三県一局時代に農商務省属として根室に着任した」「（当時の道東は）漁業に携わる人に死者が出た場合、浜辺にある神社には常駐の神主は居らず、またお寺も存在しなかったのでアメリカ



（写真①）佐々木郁の女子神学校「卒業証」



（写真②）佐々木郁の作品 司祭服用の「腹帯」
（縦 102cm 横 14.2cm、周囲の白い部分は和紙）



（写真③）佐々木郁の女子神学校卒業写真
（明治39年7月）

前列左から中井終子、東海林（旧姓泉水）イヨ、
児玉菊子、白極良子、伊東祐子、
中列左から3人目佐々木郁

やロシアの宣教師が千島の色丹島から来て、葬式を執り行なう状態であった」⁽⁶⁴⁾。源一はロシアの宣教師と交流するなかで、正教会の機関紙「正教新報」等を取り寄せて読むようになり、正教へ関心を深め、娘郁を女子神学校に進学させる決意を固めるようになった。郁は1901年（明治34）9月に女子神学校に入学し、1906年（明治39）に首席で卒業した（写真①）。

佐々木郁の裁縫作品の中には、女子神学校特有の作品がある。それはバラの緻密な刺縫をした「腹帯」（写真②）である。この「腹帯」は「正教の司祭がマント状の上着（リヤサ）の下に着る黒長の服（ポドリヤサ）につける飾り帯である。バラに信仰上の意味はない」⁽⁶⁵⁾。

女子神学校では裁縫の時間とは別に、独立した学科として刺縫があった。佐々木郁の卒業写真には裁縫教師白極良子・東海林（旧姓、泉水）イヨと刺縫教師伊東祐子の姿もある（写真③）。

刺縫は外部から専門家を招き、指導を仰ぐほどの熱心さで教えられていた。

「（明治27年）九月本校付属の西洋館の東北室を修繕して刺縫教場となせり」「此の刺縫科は明治十九年の頃伊東エウフィミヤ姉を教師として学科に編入せしが更に同年（明治27年）に至りて堀留縫箔師神谷源四郎氏を雇ひて専ら聖堂用の物品に刺縫し大にこの業を奨励することとなれり」⁽⁶⁶⁾とある。

ニコライの日記には「祭服本体の裏地にはこれを仕立てた女学生全員の名前が書かれてあった」（1902年6月26日）⁽⁶⁷⁾とあるので、女子神学校では、司祭の祭服を縫製できるほどの高い水準の授業が行われていたといえる。

おわりに

本稿では、ニコライによって東京に創立された女子神学校が、女子の中等教育機関が少なかった明治前半期に、特に宮城県の正教徒の女性たちにとっては、女子教育の場として大きな役割を果たしたことを確認した。また、女子神学校の舎監や教師として、ニコライと共に学校運営を担った仙台ハリストス正教会出身の信徒

である二人の女性の後半生を明らかにした⁽⁶⁸⁾。

菅野の職名は女子神学校の舎監であるが「実に一校の校長たるの職責を全うしたるの婦人なり」と、評価された女性である。しかし、彼女の給与は月額5円で、一方、正教神学校の校長瀬沼恪三郎の給与は、ニコライの日記(1903年8月4日)によると諸経費を含めて月額80円であった⁽⁶⁹⁾。両者の学歴の差を考慮しても、賃金格差はあまりにも大きい。しかし、菅野秀子は「旧幕時代に人と成りたる」女性であり、彼女がニコライの学校運営に異議を唱えることはなかった。

菅野の死後、ニコライが女子神学校の校長を兄玉菊子に決めたことは前述した。しかし、兄玉菊子が正式な校長になるのは、1911(明治44)9月5日に女子神学校の校長佐藤秀六が死去した後であり、同月27日に「大主教ニコライ」の名前で兄玉菊子の「校長認可願」が東京府知事阿部浩に提出された⁽⁷⁰⁾。

明治期に女性が女学校を創立し、名実共に校長になった例は幾つもあり、当時の社会が女性校長を排除していたわけではない。また、ニコライも女性校長を全面的に認めなかったわけではないが、女性の登用を積極的に進めなかった。

漢学者中井木菟麿はニコライの翻訳協力者として聖書や祈祷書などの翻訳に大きな業績を残している⁽⁷¹⁾。木菟麿は1878年(明治11)に大阪ハリストス正教会で洗礼を受けた。「木菟麿はキリスト教と儒教は合体すべき」⁽⁷²⁾との信念をもち、儒教的教養とキリスト教の信仰が共存していた。木菟麿のこのような考え方は、正教神学校で論語等の四書を学ぶ教育内容にも反映されている。ニコライが日本での宣教を成功させるためには、伝教者や翻訳者の存在は不可欠であった。ニコライは儒教的教養を身に付けた彼らと折合いをつけながら、一方では、女性の能力を最大限に実務面で発揮させた現実的な学校経営者でもあった。

本稿では、渡邊辰五郎のもとで学んだことを示す泉水イヨの履歴書から、明治の裁縫教育の先駆者である朴澤三代治と渡邊辰五郎の2つの教授法の出会いの場に、女子神学校が成りうる

可能性を示唆することができた。女子神学校の裁縫教育のなかで、朴沢流と渡邊流が、どのように生かされ、いかに取捨選択されたのか、という観点でみるならば、佐々木郁の裁縫作品はこの課題を検討する貴重な資料として、新たな価値が付与されるであろう。この課題については稿を新たにしたい。

[注]

- (1) 岡畏三郎監修、鹿島卯女編『山下りん：黎明期の聖像画家』(鹿島出版会、1976年)、川又一英『ニコライの塔：大主教ニコライと聖像画家山下りん』(中公文庫、1992年)等がある。
- (2) 中村健之介編訳『ニコライの日記(上)』岩波書店、2011年、41頁・42頁
- (3) 函館ハリストス正教会史編集委員会『函館ハリストス正教会史』2011年、14頁
- (4) 山崎瞳『聖ニコライ来函150周年——幕末・箱館にもたらされたもの——』函館学ブックレットNo.18、キャンパス・コンソーシアム函館、2012年、17頁
- (5) 中村健之介・中村悦子『ニコライ堂の女性たち』教文館、2003年、xiii
- (6) 石川喜三郎『日本正教伝道誌』、正教会編輯局、1901年、244頁
- (7) 牛丸康夫『日本正教史』日本ハリストス正教会教団府主教庁、1978年、55頁
- (8) 高橋五子編『鏡花録』女子神学校同窓会、1896年、19頁
- (9) 澤邊房子は澤邊琢磨の最初の妻友子の妹タネ子の娘である。友子が発狂したため、妹タネ子が婚家から娘房子と息子悌次郎を連れて、姉友子等の世話のために実家に戻り、義兄琢磨の後妻になった。前掲(5)48頁
- (10) 中村健之介訳編『明治の日本ハリストス正教会』教文館、1993年、40頁・41頁
- (11) 「東京の各種学校」(『都史紀要17』東京都、1968年2月、86頁・87頁・93頁)
- (12) 「明治十六年自五月至六月私立各種学校書類」(東京都公文書館)
- (13) 同前
- (14) 前掲(8)24頁
- (15) 『千代田区女性史第1巻』ドメス出版、2000年、「東京の女子教育」(『都史紀要5』東京都、1961年11月)

- (16) 東京女子神学校・京都正教女学校校友会報『おとづれ』創刊号、1970年、41頁
- (17) 中村健之介編訳『宣教師ニコライの全日記』第9巻、教文館、2007年、313頁・314頁
- (18) 前掲(10) 31頁・41頁によると、伝教学校は信仰を広めることで教会に仕えたいと望む18歳～60歳の男子が規範神学、聖典解釈、旧・新約聖歴史、教会史を学び、修学年数は1年である。誦経者学校では聖歌、誦経、聖体礼儀式順を重点的に学んだ。
- (19) 前掲(8) 9頁
- (20) 『宣教師ニコライの全日記』にはロシア暦(ユリウス暦)と新暦(グレゴリウス暦)が併記されているが、本稿では新暦で統一する。
- (21) 前掲(17) 第4巻196頁、『宣教師ニコライの全日記』の凡例によると、() はニコライの日記原文にある括弧、[] は翻訳者および監修者による注記とある。
- (22) 前掲(17) 第4巻、385頁
- (23) 「第三課文書・学務・各種学校・第3巻<第三課(官房)>」(東京都公文書館)
- (24) 同前
- (25) 前掲(11) 92頁
- (26) 「第三課文書・学務・各種学校教員・第1巻<第三課(官房)>」(東京都公文書館)
- (27) 竹中正夫『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』教文館、2000年、80頁
- (28) 前掲(16) 第2号、1971年、68頁
- (29) 前掲(7) 102頁
- (30) 前掲(5) 第4章、第5章、第6章、第7章
- (31) 前掲(5) 502～504頁
- (32) 「明治四十五年大正元年文書類纂学事」(東京都公文書館)
- (33) 前掲(16)、99頁
- (34) 前掲(5) 413～428頁
- (35) 前掲(10) 32～34頁から、1878年(明治11)の教会付属の伝教学校在校生28人の出身地がわかる。宮城県出身者は10人で最多である。
- (36) 山下須美礼『東方正教の地域的展開と移行期の人間像』第4章第1節、清文堂、2014年
- (37) 前掲(10) 12～22頁
- (38) マップの発行年は不明。2017年7月現在、ハリストス教会が配布のもの
- (39) 菊田定郷『仙台人名大辞書』(復刻) 仙台人名大辞書刊行会、1933年、276頁・277頁
- (40) 前掲(17) 第4巻9頁
- (41) 「明治二十七年第三種官房文書類別外務」(東京

都公文書館)

- (42) 前掲(17) 第2巻247頁
- (43) 前掲(17) 第9巻288頁
- (44) 前掲(17) 第9巻291頁
- (45) 前掲(17) 第9巻296頁
- (46) 前掲(17) 第9巻298頁
- (47) 前掲(17) 第5巻188頁
- (48) 前掲(17) 第5巻193頁
- (49) 前掲(17) 第5巻195頁
- (50) 前掲(17) 第5巻239頁
- (51) 前掲(17) 第5巻175頁
- (52) 前掲(17) 第5巻177頁
- (53) 前掲(17) 第5巻287頁
- (54) 前掲(17) 第5巻289頁
- (55) 前掲(17) 第5巻307頁
- (56) 前掲(17) 第4巻280頁
- (57) 前掲(17) 第6巻54頁
- (58) 「明治二十五年公文備考 恩給一卷八」
- (59) 朴澤三代治の裁縫教育についての研究には、千葉昌弘「明治初期宮城県の女子教育と(初代)朴沢三代治」(『仙台大学紀要』第8集、1976年)、植村千枝「家庭科教育における技能・技術(2)——初代朴沢三代治の裁縫教育とその周辺——」(『宮城教育大学紀要』第20巻、1985年)、同「家庭科教育における技能・技術(3)——宮城県を中心にした裁縫教育成立の背景」(『宮城教育大学紀要』第21巻、1986年)等がある。近年の研究には菊池慶子「近代宮城の裁縫教育と朴澤三代治——裁縫雛形を用いた一斉教授法——」(『東北文化研究所紀要』第45号、2013年)、佐藤和賀子「朴澤三代治と裁縫教授用掛図」(『仙台大学紀要』第44巻第2号、2013年)等がある。
- (60) 前掲(17) 第9巻115頁
- (61) 朴澤三代治の裁縫関係資料については、学校法人朴沢学園『朴沢学園裁縫教育資料集第一集』(2012年)、同『朴沢学園裁縫教育資料集第二集』(2014年)等がある。渡邊辰五郎の裁縫関係資料については、東京家政大学博物館編『重要有形民俗文化財渡辺学園裁縫雛形コレクション』上・下巻(東京家政大学博物館、2001年)、三友晶子・太田八重美編『重要有形民俗文化財指定10周年記念渡辺学園裁縫雛形コレクション』(東京家政大学博物館、2010年)等がある。
- (62) 「明治三十年第三課文書類別学務」(東京都公文書館)
- (63) 柏村知子「伝記ニコライ堂で学んだ柏村郁(一)」(『女性史研究ほっかいどう』第4号、2010年)
- (64) 同前20頁

- (65) 仙台ハリストス正教会・司祭兄玉慎一様から御教示をうけた。
- (66) 前掲（8）34頁・35頁
- (67) 前掲（17）第7巻125頁
- (68) 「正教時報」（第19巻第6号、1930年6月15日）は「仙臺教會史料」に依拠し、仙台正教会出身教役者60人の名前を掲載し、影田孫一郎、小野庄（莊）五郎、高屋仲、佐藤秀六、笹川定吉等と並び「女子神学校舎監菅野秀」、「女子神学校教師白極良」の名前がある。（教会史編集委員会『仙台ハリストス正教会史』仙台ハリストス正教会、2004年、142～144頁）
- (69) 前掲（17）第7巻、293頁
- (70) 「明治四十四年文書類纂学事」（東京都公文書館）
- (71) 中井木菟麿の実家は大坂の学問所である懷徳堂である。1869年（明治2）に懷徳堂は廃校になった。
- (72) 前掲（5）11頁

付記

柏村家から寄贈された佐々木郁の裁縫作品と関連資料は、現在、朴沢学園裁縫教育資料室に所蔵されている。

本稿執筆に際し、日本ハリストス正教会教団・仙台の大主教辻永昇様、仙台ハリストス正教会・司祭兄玉慎一様から貴重な資料のご貸与とご教示をいただきました。記して御礼申し上げます。